

美術館館長とのつれづれなる談義[2014 年春]

先日、大阪府枚方市にある公益財団法人天門美術館の特別展(平成 26 年 4 月 9 日から 4 月 30 日)へ行ってきました。

公益財団法人認定記念特別企画

大阪画壇の絵画展 —関西大学コレクション—

観賞の後、いつものように館長とお話をしました。その時の内容をお伝えします。
今回は、美術以外のお話を。

《明治の人》

一般にも言われますが「明治の人は骨があった。」
もう明治生まれの方にお目にかかることはありませんが、自分の祖父母を思い返しても絶対にあてはまります。考え方に一本筋が通っていましたが、矍鑠(かくしゃく)としていました。

「文章の品格」が違う、と館長はおっしゃいます。
なかなか真似をすることができないと。
明治の文章には、表現方法、単語等あらゆる面において重みがあると理解します。中学生時代に夏目漱石や森鷗外を『カタいなあ。』と思いながら読んでいたことを思い出しました。
そこには、自己主張が頑としてあったように感じます。

現代はというと、柔らかい文章で溢れています。
読みやすいように配慮している面もありますが、考えを整理せず頭に浮かんだものがそのまま文字になったと思われるものが少なからず見受けられます。
ということは、文書の違いは考える力の違いなのでしょうか。

《流れ》

監督 黒沢明の『生きる』という映画。

館長は次のように解説してくれました。



役人である主人公は、決済印を押して毎日を過ごしていた。自分の担当部署でもめ事を起こさないことを最大の使命にして。

ところがある日、胃がんが判明し余命半年と診断されが、家族には事情を知らさない。人生の意味を見失い、放蕩する。若い女性の奔放な生き方に惹かれる。市民の願いに応じて公園建設のために役所中を駆けずり回る。

通夜の席で、回想という形で主人公の生き方が変わったことが披露され、同僚が涙する。こうあるべきだ。今のままではいけない。しかし、翌日になるといつもどおりの決裁印押しに戻っていた。

ヒューマニズムの話から派生して、組織論に転じました。

新しい血が入れば活性化する組織であってほしいと思います。つまり、個人が組織に影響を与えるわけです。しかし、組織と個人の関係で組織が強すぎると、個人が組織に服従するようになります。その状況下で、組織が変わることはありません。

『生きる』では、役人の仕事は相変わらず判子押しです。

流行を追う、流れに乗ることが重要視される現代です。

例えば、藤原正彦さんの『国家の品格』が売れると、『男の品格』、『女の品格』と次々に世に出て来ます。

流れに逆らうことはしません。

エネルギーの無駄遣いなのでしょうか。

《男社会》

英国 BBC 制作のミステリードラマ『**第一容疑者**』が秀逸。

館長はたまたまテレビの深夜放送で目にして、主人公の生き方に魅力を感じ、主演女優の虜になったそうです。

警察組織の中で、能力を発揮する場所を与えられずに過ごして来た中年女性にチャンスが巡って来る。

男社会の中で自分なりに必死で行動する。考える。

女優の名は、ヘレン・ミレン。

映画にもなっているようです。

その他にも、館長と語り合いました。有意義なお話相手です。

また、**天門美術館**にお伺いするつもりです。